

## 国破れて……

ぼくが、終戦を迎えたのはね、満三十歳。復員してきたとき、二、三年前に韓国の人が線路に飛び降りて日本人の命を助けた、あの大久保の駅あたりからね、ホームに立ってみると両国の川が見えた。そのくらい焼け野原、まさに「国破れて山河あり」の状態だった。

そのころ、おおかたの日本人は死ぬ気でいたんですよ。なぜそうなったかというね、一番の原因は例の戦陣訓。たとえ捕虜になっても生き恥さらしちゃいかんと。ぼくは六年間軍隊にいたけれど、ついぞそんなこと考えたこと無い。ぼくらの世代はね、軍隊はお勤め。お勤めしたら生きて帰ってきてまたお国のために役に立つと思っていた。ところが、ぼくより二年後の連中はね、みんな死ぬ気で軍隊に入ってきている。

この戦陣訓というのは、これ、かみさんがいつもポケットに入れていたものなんだけど、この戦陣訓の最初の版はね、東条英機が……東条英機って名前知ってる？

——ぼく（笑）

東条英機がね、当時中将で大将でもなかった。最近、麻生とか何とか言う人が総理大臣になってよっぼど嬉しかったと見えて、めずらしく「御名御璽」って言葉を使いましたね。ところが、この戦陣訓はその「御名御璽」つまり天

皇のお名とはんこも得ないで、「陸軍大臣東条英機」という肩書きで昭和一六年の一月八日の日付で発行された。

そこには、「生死を超越し一意任務の完遂に邁進すべし。身心一切の力を尽くし、従容として悠久の大義に生くることを悦びとすべし」と書いてある。これ、美しい言葉だけど、つまり「死ぬ」ということ。この死生観と名を惜しむというのが、国民全部の胸の底に刻まれた。だからサイパン島でも、沖縄でもみんな従容としてね、死んだわけだ。そういう時代の人たちがみなぞくぞくと生きて軍隊から帰ってきて、日本中が「死」という字を大きく書いたみたいだね、「死」の国家になっていた。主体性という言葉がそのころ流行だったんだが、主体性をもって、生きる実存というものをちゃんと自分で握りしめなくてはいけない。そのために、理論社を創って「季刊理論」という雑誌を出し始めた。それが一九四七年だ。いまでも「季刊理論派」という言葉がちよくちよく聞けますが、季刊理論派の御大將はまだ三〇代の小宮山さんだったわけだ。つまり、戦後の出発点にあった第一の問題は生きるという問題。

## バラバラにされる日本

第二の問題が何かというと日本が植民地になるだろうということ。

「支配するには分裂せしめよ」という原則で、国民を先ず